

2年 生活科研究授業のまとめ（9月28日）

1 単元名及び単元の目標

どきどきわくわくまちたんけん（7/14本時）

- ◎自分たちで計画を立てて、身近な地域に出かけ、様々な場所を調べたり、地域の場所や人とのかかわりを広げたりするとともに、地域に親しみをもち、人々と適切に接したり、安全に気を付けて生活したりできるようにする。



【資料1 話し合いの場の設定】

2 本研究授業の提案について

児童が意欲的に話し合い、互いの意見を聞き合って町探検への思いを膨らませるための手だてとして、以下の二つを提案した。

- (1) 児童が主体的に町探検でしたいことを考え、思いを膨らませていくことができるようにするための手だてとして、学習活動を工夫した。本時の学習では、「町探検をする場所でお店の人と一緒にしてみたいことを考え、依頼状を書く活動」を設定した。児童には、課題提示の段階で、この学習で書いた手紙は、後日教師が店に見学依頼をする際に手渡すことになるので、見学が実現するように自分たちの思いをできるだけ膨らませて依頼状の内容を考えることを伝えた。このことにより、児童は何を考え、何のために話し合うのか目的を明確に把握することができた。また、話し合ったことが学習の中でどのように生かされていくのか見通しを持って活動することができた。しかし、発問や資料提示で児童の知的好奇心を喚起する仕掛けが授業の中で足りず、話し合う意欲を高めることには繋がらなかった。例えば、「なぜ、マカロン屋さんでは値段が高いのに行列ができるのか」など、教材研究を生かした発問や資料提示をして、知的好奇心を喚起する場面が必要だった。
- (2) 特定の児童だけではなく、全員が話し合いに参加し、町探検への思いを伝え合いながら膨らませていくことができるように話し合いの方法を工夫した。まず、個人思考の時間を確保し、考えたことを短冊に書かせた。次に、グループごとに一人一人順番に発表をしながら、短冊をホワイトボードに貼っていった（資料1）。そして、ホワイトボード上で短冊を整理しながら、それぞれの思いを共有した。全員の考えを出し合い、整理した上で、お店でしてみたいことの優先順位を決めさせた。その際にも、一人が続けて話すのではなく、順番に発言するようにした。話し合いの手順を細かく示すことで、どのグループでも、特定の児童の意見で意思決定されることなく、全員の意思表示や発言が生かされる話し合いをすることができた。また、短冊を整理する場面では、ホワイトボードの前に身を寄せて、活発に意見を伝え合う姿が見られていた。しかし、最後の優先順位を決定する話し合いの場面では、場の設定が机を円形に並べた配置になっていたため、児童同士の距離が離れてしまい、意見を伝え合うことを難しくなってしまったので、場の設定を考慮する必要があった。

3 本研究授業の授業技術課題について

話し合いの過程を見取り、必要に応じて修正したり、全体で情報を共有させたりして話し合いへの支援を行った。「お茶を作りたい」ということを話し合っているグループで「お茶を入れること」と「お茶の葉をブレンドすること」という二つの「作る」という意味を混同して話し合いを進めているグループがあった。自分たちがどちらについて話し合っているのかを共有させた上で話し合いを進めさせた。各グループの論点を整理しながら話し合いを進めさせることができた。

4 今年度の研究を振り返って

今年度の研究では、2回の研究授業を町探検の単元で行った。どちらの授業でも、ロールプレイや話し合いの仕方の工夫など児童が意欲的に話し合うための学習方法を検証した。どちらの学習でも、自分なりに考え、それを伝えようとする姿が見られ、検証した学習方法は、話し合いへの参加意欲を促す、上で一定の成果を得ることができたと考える。また、1回目の授業では、児童の思いを課題提示の際に引き出し、それを生かした協働的な学びをさせることができた。しかし、2回目の授業では教師側の仕掛けが不十分で、児童の意欲を十分に膨らませることができず、活発に個々の意見を伝え合う姿を十分に引き出すことができなかった。協働的な学習において個々が主体的に考えるためには、「一人一人が自分のこととして課題をとらえることができる」教師の仕掛けや参加意識を高める人数や場の適切な設定が重要であることを確認することができた。本研究で学んだことを、次年度以降の指導に生かしていきたい。